

# 悠久の京を訪ねて Part III Vol.4



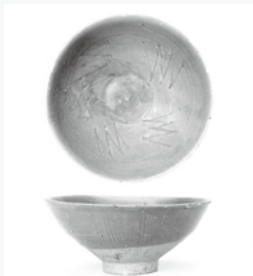
京は古より人々が集い、その気候・風土の中、人々の生活が営まれてきました。  
 京都府内の遺跡で多数発掘された出土品により、縄文・弥生時代までさかのぼり、当時の様子を知ることができます。  
 私たちが住んでいる地域にはどのような歴史があったのか、出土した資料を基に過去の文化やその発祥の歴史を訪ねましょう。

## 平氏の繁栄と中国製陶磁器

### ■平清盛と日宋貿易

平安時代の終わりごろ、平氏政権の登場によって日本は貴族中心から武士中心の世の中へと移りかわりました。武士としてはじめて大宰府（福岡県にあった古代の官庁で軍事や外交も担った）の大貳となった平清盛は、このころから、中国（当時は宋）を意識するようになったのかもしれませんが。

大きな社会変動の中で、平清盛が大輪田泊（神戸市）を修復したことは象徴的な出来事でした。これによって、宋の船が瀬戸内海を航行し、福原京（神戸市）の近くまで直接来ることとなったのです。宋の船を見に後白河法皇や平清盛が福原京を訪れたことが、当時の貴族の日記に書かれています（『玉葉』）。



日本貿易で輸入された青磁椀  
 （八幡市内里八丁遺跡出土）

中国製陶磁器は、中国から北九州を経由し、瀬戸内海を通過して大阪から淀川を遡り、都に運ばれました。そして、都からさらに全国に運ばれていきました。経由地であった九州の大宰府や博多での発掘調査では、中国製陶磁器が大量に出土しています。

### ■平頼盛と大内城跡

平清盛の弟に平頼盛という人物がいます。清盛の後に大宰府の大貳となった実力者です。彼は全国に多くの荘園をもっていました。福知山市の六人部荘もそのひとつです。

福知山市大内城跡は、平安時代末期の六人部荘を管理する荘官の屋敷跡と考えられています。昭和56年の近畿自動車道建設に伴う発掘調査で掘立柱建物や堀、土塁、柵などが見つかるとともに、1,300点を超える中国製陶磁器の破片が出土しました。平安京や鎌倉などの主要都市を除く多くの遺跡での出土量が数十点程度ですから、飛び抜けて多いといえます。この荘園の領主が平頼盛であったことに関係すると考えられます。

平氏のトップクラスにいた人物が、いかに日宋貿易によって力を持ち、各地の荘園に影響を与えていたかを物語っています。



大内城の生活の様子（作画：早川和子）